



Title	西フリジア語の接頭辞動詞とbe-動詞について
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 140, 57(左)-97(左)
Issue Date	2013-07-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52967
Type	bulletin (article)
File Information	03_SHIMIZU.pdf



[Instructions for use](#)

西フリジア語の接頭辞動詞と be-動詞について

清水 誠

Oer prefiksferba en be-ferba yn it Westerlauwersk Frysk
(*The Annual Report on Cultural Science* No. 140. Graduate School of
Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2013. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1. はじめに

一般にゲルマン諸語の伝統的な文法記述では、接頭辞動詞（ド Präfixverb）はいわゆる非分離動詞（ド untrennbares Verb）の中心のカテゴリーとみなされることが多い。非分離動詞と対をなすのがいわゆる分離動詞（ド trennbares Verb）であり、その主要部分を占めるのは不変化詞動詞（ド Partikelverb）である（例 ド ankommen「到着する」→er kommt... an「彼は到着する」（不変化詞 an）¹）。近年の正書法改革で分離動詞の範囲を狭く限定したドイツ語（ド）では、とくにその傾向が強い。2006年から正式に実施されたドイツ語の不正書法では、一部の語について、それ以前は分離動詞

¹ 大多数が OV 型を基本語順とする西ゲルマン諸語の中で、例外的に VO 型を基本語順とする英語では、分離動詞に対応するカテゴリーに句動詞（phrasal verb）という用語を用い、動詞の形態的分類に分離・非分離という用語は用いない。ただし、同じく VO 型が基本語順の北ゲルマン語でも、伝統的には分離動詞、非分離動詞という用語が一般的である。

の分離成分とみなしていた不変化詞以外の要素を動詞の部分から分かち書きすることで、正書法上は分離動詞として認めなくなった（以下の例は「新正書法」<「旧正書法」の順）。

- (1) ド Rad fahren 「自転車に乗る」(er fährt...Rad 「彼は自転車に乗る」)
<radfahren (er fährt...Rad) (名詞 (Fahr-)rad 「自転車」)
fertig machen 「仕上げる」(sie macht...fertig 「彼女は仕上げる」)
<fertigmachen(sie macht...fertig) (形容詞 fertig「できあがった」)
kennen lernen 「知り合いになる」(er lernt...kennen 「彼は知り合いになる」)<kennenlernen (er lernt...kennen) (動詞 kennen 「知っている」)

ただし、teilnehmen 「参加する」(sie nimmt...teil 「彼女は参加する」(名詞 Teil「部分」)、schwarzfahren「不正乗車する、無免許運転する」(er fährt...schwarz 「彼は不正乗車・無免許運転する」)(形容詞 schwarz 「黒い」)のように、改正の対象外となった分離動詞との相違が不明確であるという指摘も根強い。さらに、上記の不定詞から現在形に変化させたカッコ内の例を比較すると、そもそも新・旧正書法の間には構造的に何の相違も見られない。このように、分離動詞の定義には正書法上の便宜的性格が強く、分離成分の種類と動詞との語彙的な結束性の問題をめぐって、あいまいさがつきまとう。たとえば、亀井/河野/千野(1996:1202)は「分離動詞は、正書法と文法規則を混同したことによって作り出された似而非カテゴリーのようである」と述べている。分離動詞の問題については稿を改めて論じたい。

さて、分離動詞と非分離動詞はともに本稿で扱うドイツ語、オランダ語(オ)、西フリジア語(西フ)に共通して数多く認められる²。ただし、非分離

² 分離動詞を「ゲルマン諸語、とりわけドイツ語とオランダ語に見られる」とする亀井/河野/千野(1996:1202)の記述は誤りである。分離動詞は英語などごく少数の例を除いて、OV型の基本語順を保つ西ゲルマン語の大多数に共通している。

動詞もまた、雑多な動詞のクラスを内包する用語といえる。たとえば、西フリジア語（西フ Westerlauwersk Frysk, オランダ・フリースラント州, 35~40 万人）には、名詞抱合 (noun incorporation) という語形成上の規則によって生産的に作り出される「名詞 (N)+動詞 (V)」の語順の非分離動詞が豊富にあり、他の西ゲルマン諸語、とくに本稿で扱うドイツ語やオランダ語とは大きく異なる (N+V → [NV]v)。この種の名詞抱合は北フリジア語とザーターフリジア語 (ド Saterfriesisch, いわゆる「東フリジア語」) にも見られ、北海ゲルマン語の歴史的後裔であるフリジア語群に共通の特徴といえる (Dijk 1992, Dijk 1997, 清水 2006a : 512-537)³。

(2) 西フ kofjedrinke 「コーヒーを飲む (=コーヒータイムを取る)」

←kofje 「コーヒー」+drinke 「飲む」

Hy *kofjedrinkt* om tsien oere. 「彼は (hy) 10 時に (om tsien oere) コーヒーを飲む (=コーヒータイムを取る, 現在形 *kofjedrinkt*)」

Hja begûn *te kofjedrinken*. 「彼女は (hja) コーヒーを飲み (第 2 不定詞 *te kofjedrinken*⁴) 始めた (begûn) (=コーヒータイムを取り始めた)」

オ koffie drinken

Hij *drinkt* om tien uur *koffie*.

Zij begon *koffie te drinken*.

ド Kaffee trinken

³ 名詞抱合はゲルマン語としてはフリジア語群に限定された現象ではなく、スウェーデン語など、北ゲルマン語にも存在する (清水 2006b)。アイスランド語にも少なからず認められるが、この点については稿を改めて論じたい。

⁴ 西フリジア語には「第 1 不定詞」(e-不定詞)、「第 2 不定詞」(en-不定詞)、「第 3 不定詞」(命令形不定詞) という 3 種類の不定詞がある。第 1 不定詞は話法・使役などの助動詞、第 2 不定詞は知覚動詞、不定詞標識 *te* (ド *zu*, 英 *to*)、前置詞などに支配された場合に用いる。本稿には用例がない第 3 不定詞を含めた 3 種類の不定詞の用法については、清水 (2006a : 631ff.), 清水 (2004 : 1ff.) 参照。

Er *trinkt* um zehn Uhr *Kaffee*.

Sie *began Kaffee zu trinken*.

このほかに、西フリジア語には別の種類の名詞抱合がある。これは「動詞 (V)+名詞 (N)」という逆の語順をとるもので、30 語程度に限定されている (V+N → [VN]v)。すでに述べた抱合動詞が一般に動作主 (agent) を主語とする行為動詞であるのにたいして、ここでの主語は経験者 (experiencer) であり、反射的・感情的な反応を表し、名詞はその反応を表現する直接的手段としての身体部位に限られる。このタイプの非分離動詞としての抱合動詞は、オランダ語でも同じ程度の規模で認められるが、ドイツ語には存在しない (Weggelaar 1986, 清水 2007: 537-539)⁵。

- (3) 西フ stampfuotsje「足踏みする」←stampe「踏む」+fuot- (←foet「足」)
 Hy *stampfuottet* fan ûngeduld. 「彼は (hy) じれったくて (fan ûngeduld) 足踏みする (現在形 *stampfuottet*)」
 オ stampvoeten←stampen+voet
 Hij *stampvoet* van ongeduld.
 ド (mit den Füßen) stampfen 「足で (mit den Füßen) 踏む (stampfen)」
 Er *stampft (mit den Füßen)* vor Ungeduld.

以上の事実から明らかなように、ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の

⁵ 低地ドイツ語には西フリジア語やオランダ語と同様に、「動詞 (V)+名詞 (N)」の語順の抱合動詞がある (Thies 2011²: 254, Lindow et al. 1998: 62f.)。北低地ザクセン方言 (ド Nordniedersächsisch, 北低ザ) の例を示す。

北低ザ tuckschullern「肩をすくめる」(←tucken「ぴくっと引く、振る」+schuller「肩」)
 ー西フ skokskouderje (←skokke+skouder)ーオ schokschouderen (←schokken+schouder)ード die Achseln/mit den Achseln zucken 「肩を (die Achseln)/肩で (mit den Achseln) ぴくっと引く (zucken)」

非分離動詞が覆う範囲は一致しない。一方、接頭辞動詞に限っても、3言語間には以下に述べるように、大きな相違が認められる。本稿は、とくに用法が多岐にわたる西フリジア語の動詞接頭辞 be- に焦点を当て、オランダ語とドイツ語との比較を通じて、その理由を西ゲルマン語に属する3言語の動詞接頭辞の体系に照らし合わせて究明する試みを行う。

2. 西フリジア語の be-動詞の用法 — ドイツ語とオランダ語との比較

2.1. 3言語に共通の be-動詞

上記の3言語に共通する非分離動詞の中心的カテゴリーである非分離動詞の中で、顕著な特徴を示すのが西フリジア語の動詞接頭辞 be- である(清水 2002: 35ff., 清水 2006a: 553ff.)。西フリジア語の be-動詞には、ドイツ語やオランダ語と同じく、be- を除いたもとの動詞との語形的対応を欠く語(例 ド/オ *beginnen*—西フ *beginne*「始める, 始まる」(英 *begin*)), および意味的対応が不明確な語(例 ド *besitzen*—オ *bezitten*—西フ *besitte*「所有する」↔ド *sitzen*—オ *zitten*—西フ *sitte*「すわっている」)が含まれる。以下では、この種の語彙的に固定した be-動詞を除き、be- がもとの動詞に一定の意味的・統語的役割を付与する場合に限定して論じる。

まず、be- は動詞の結合価(valency)の変更を伴って、前置詞句目的語(PP)を伴う自動詞から名詞句(厳密には限定詞句, DP)を目的語とする他動詞を派生することがある⁶。このはたらきは3言語に共通している。このとき、①の例に見られるように、be-動詞は動作の実現・結果を強調するニュアンスを帯びることがある。

⁶ 伝統的な「名詞句」(NP, noun phrase)に代わって、近年の統語論では「限定詞句」(DP, determiner phrase) という用語が広く用いられている。本稿では、「限定詞句」という訳語があまり普及していない事情を考慮して、便宜的に「名詞句」と DP を折衷して示す。

(4) 他動詞の派生：他動詞 (DP *be*-V)←自動詞 (PP V)

① 西フ DP *beäntwurdzje*「…に (DP) (きちんと) 答える (*beäntwurdzje*)」

←op+DP *antwurdzje*「…に (op+DP) 答える (*antwurdzje*)」

Hja *hat* syn fraach freonlik *beäntwurde*. 「彼女は (hja) 彼の質問に (syn fraach) 親切に (freonlik) (きちんと) 答えた (現在完了形 *hat...beäntwurde*)」

←Hja *hat* op syn fraach freonlik *antwurde*. 「彼女は (hja) 彼の質問に (op syn fraach) 親切に (freonlik) 答えた (現在完了形 *hat...antwurde*)」

オ DP *beantwoorden*←op+DP *antwoorden*

Zij *heeft* zijn vraag vriendelijk *beantwoord*.

←Zij *heeft* op zijn vraag vriendelijk *geantwoord*.

ド DP *beantworten*←auf+DP *antworten*

Sie *hat* seine Frage freundlich *beantwortet*.

←Sie *hat* auf seine Frage freundlich *geantwortet*.

② 西フ DP *betwivelje*「…を (DP) 疑う (*betwivelje*)」

←oan+DP *twivelje*「…を (oan+DP) 疑う (*twivelje*)」

Hy *betwivelet* de krektens fan har ferhaal. 「彼は (hy) 彼女の話の (fan har ferhaal) 正しさを (de krektens) 疑っている (現在形 *betwivelet*)」

←Hy *twivelet* oan 'e krektens fan har ferhaal. 「彼は (hy) 彼女の話の (fan har ferhaal) 正しさを (oan 'e krektens) 疑っている (現在形 *twivelet*)」

オ DP *betwijfelen*←aan+DP *twijfelen*

Hij *betwijfelt* de juistheid van haar verhaal.

←Hij *twijfelt* aan de juistheid van haar verhaal.

ド DP *bezweifeln*←an+DP *zweifeln*

Er *bezweifelt* die Richtigkeit ihrer Geschichte.

←Er *zweifelt* an der Richtigkeit ihrer Geschichte.

be-動詞はまた、全体的影響を与える対象を名詞句目的語として、新たな他動詞を派生する代換表現 (hypallage) を引き起こす。これも 3 言語に共通である。

- (5) 代換表現 (全体的影響) : DP₂ P₂+DP₁ be-V←DP₁ P₁+DP₂ V
- 西フ DP₂ mei (英 with)+DP₁ *beplantsje* 「…を (DP₂) …で (mei+DP₁) 植え尽くす (*beplantsje*)」
- ←DP₁ P₁+DP₂ *plantsje* 「…に (P₁+DP₂) …を (DP₁) 植える (*plantsje*)」
- Hja *beplante* de tún mei roazen. 「彼女は (hja) 庭を (de tún) バラで (mei roazen) 植えつくした (過去形 *beplante*)」
- ←Hja *plante* roazen yn 'e tún. 「彼女は (hja) 庭に (yn 'e tún) バラを (roazen) 植えた (過去形 *plante*)」
- オ DP₂ met+DP₁ *beplanten*←DP₁ P₁+DP₂ *planten*
- Hij *beplantte* de tuin met rozen.
- ←Hij *plantte* rozen in de tuin.
- ド DP₂ mit+DP₁ *bepflanzen*←DP₁ P₁+DP₂ *pflanzen*
- Er *bepflanzte* den Garten mit Rosen.
- ←Er *pflanzte* Rosen im Garten.

be- はさらに、動作の結果として生じる達成目的語 (effected object) を支配する他動詞に付加されて、動作に先立って存在し、動作から直接的影響を被る被動目的語 (affected object) を含む他動詞を派生することがある。これも代換表現の一種とみなされ、3 言語に共通している。

- (6) 代換表現: 被動目的語 + be-V←達成目的語 + V
- 西フ DP₂ mei+DP₁ *beskilderje* 「…を (DP₁) …で (mei+DP₁) 彩色

する (*beskilderje*)」

←DP₁ *skilderje* 「…の絵を (DP₁) 描く (*skilderje*)」

Hja *beskildere* in glês mei oaljeferve. 「彼女は (hja) 油絵の具で (mei oaljeferve) グラスを (in glês) 彩色した (過去形 *beskildere*)」

←Hja *skildere* in glês mei oaljeferve. 「彼女は (hja) 油絵の具で (mei wetterferve) グラスの絵を (in glês) 描いた (過去形 *skildere*)」

オ DP₂ met+DP₁ *beschilderen*←DP₁ *schilderen*

Zij *beschilderde* een glas met olieverf.

←Zij *schilderde* een glas met olieverf.

ド DP₂ mit+DP₁ *bemalen*←DP₁ *malen*

Sie *bemalte* ein Glas mit Ölfarbe.

←Sie *malte* ein Glas mit Ölfarbe.

最後に、語幹に名詞などを含む be-動詞が3言語ともに数多く存在する³。これは「…に<名詞など>を備える」という意味のいわゆる装備動詞 (ornative) である⁷。

⁷ この場合、接頭辞 be- は名詞などから接頭辞動詞を直接、派生しているわけではない。動詞以外の品詞から動詞を派生するのは、品詞転換 (conversion) という別の語形成規則による。be- はその動詞を接頭辞動詞という別のカテゴリーにさらに派生し、定着させる役割を担っているとみなすべきである。一般にゲルマン語では、品詞を含む語の文法的性質を決定するのはその右側 (後方) の要素 (複合語の後半成分、派生語の接尾辞、語形変化の語尾) であり、左側 (前方) の要素 (複合語の前半成分、派生語の接頭辞) は語彙的意味、結合価、アスペクトなどを変更するにとどまる。おそらく唯一の例外は、アフリカーンス語の過去分詞標識 ge- であると考えられる (アフ *gedrink/gemaak*←*drink/maak* (英 *drunk/made*←*drink/make*, ド *getrunken/gemacht*←*trinken/machen*)。語彙体系は共時的に完璧に実現されている必要はなく、中間段階の be- を欠く動詞が現存しなくても不自然ではない (Veenstra 1988, 清水 2006b: 50)。

(7) 装備動詞の派生：装備動詞 (*be-V*) ← (装備動詞 (*V*)) ← 名詞

- ① 西フ *bewapenje*「…を武装させる」← *wapenje*「武装させる(文語的)」
 ← *wapen*「武器」
 オ *bewapenen* ← *wapenen* ← *wapen*
 ド *bewaffnen* ← *waffnen* ← *Waffe*
- ② 西フ *besielje*「…に魂を吹き込む」← (**sielje*) ← *siel(e)*「魂」
 オ *bezielen* ← (**zielen*) ← *ziel*
 ド *beseelen* ← (**seelen*) ← *Seele*

2.2. 西フリジア語に特徴的な be-動詞 (1)：ある種の他動詞の派生

西フリジア語の動詞接頭辞 *be-* には、上記以外にも多様な用法がある。そのひとつは、動作の結果として生じる達成目的語を支配する他動詞に付加されて、「…の中へ(前置詞 *yn* (ド/英 *in*) + 名詞句) 入れ込む」という意味を表す別の他動詞を派生する用法である。これも一種の代換表現といえるが、ドイツ語やオランダ語には「ド *mit*/オ *met* (英 *with*) + 名詞句」を伴う代換表現はあるものの、「ド/オ *in* + 名詞句」を伴う代換表現はない。

(8) 前置詞 *yn*「…の中に(入れて)」を用いた代換表現⁸

- 西フ DP₂ *yn* + DP₁ *bebakke*「…を(DP₂) (パンなど) の中に入れて (*yn* + DP₁) 焼く (*bebakke*)」
 ← DP₁ *bakke*「(パンなど) を (DP₁) 焼く (*bakke*)」
Moatst noch sûker yn 'e keek bebakke.「君は(代名詞脱落 Ø ← *do*⁹) まだ (*noch*) 砂糖を (*sûker*) ケーキの中に入れて (*yn 'e keek*) 焼く(第1不定詞 *bebakke*) 必要がある (*moatst*)」(Hoekstra

⁸ 以下では、*be-*を除いた動詞による用例は割愛する。

⁹ 西フリジア語では、2人称親称代名詞・単数主格形 *do* (ド *du*) は主文の前域以外にも、枠構造で左枠を占める主文の定動詞や従属文の補文標識の直後で脱落し、代名詞脱落 (*pro-drop*) を示す。

1998: 146 一部変更)¹⁰

西フ DP₂ yn+DP₁ *befrissele* 「…を (DP₂) …の中に (yn+DP₁) 編み込む (*befrissele*)」←DP₁ *frissele* 「…を (DP₁) 編む (*frissele*)」
Hja *hat* *blommen* yn 't hier *befrissele*. 「彼女は (hja) 花を (blommen) 髪の中に (yn 't hier) 編み込んだ (現在完了形 *hat... befrissele*)」 (ib. 146 一部変更)

次に, *be-* は動作の達成による対象への全体的影響として, 「効果・充足」の意味を強調する他動詞を派生することもある。

(9) 他動詞の派生：効果・充足

西フ *beslypje* 「(刃物など) を研いで鋭くする」←*slypje* 「(刃物など) を研ぐ」

Hy *beslipet* it mes. 「彼は (hy) ナイフを (it mes) 研いで鋭くする (現在形 *beslipet*)」 (Veenstra 1988: 160)

西フ *beskoffelje* 「…の雑草を抜いてきれいにする」←*skoffelje* 「…の雑草を抜く」

Hy *beskoffelet* de tún. 「彼は (hy) 庭の (de tún) 雑草を抜いてきれいにする (現在形 *beskoffelet*)」 (ib. 160)

同じく動作の達成による対象への全体的影響として, *be-* はおもに運動の動詞に付加されて「到達・遂行」の意味を明示する他動詞を派生することがある。

¹⁰ 「一部変更」とは, 筆者の判断でわかりやすい表現に改めた場合や, Tamminga (1963), Dijkstra (1900-11), Sytstra/Hof (1925) のように, 旧正書法で書かれた文献の例文を現在の正書法に置き換えた場合を指す。

(10) 他動詞の派生：到達・遂行

西フ *berinne* 「…に歩いて・走って追いつく」←*rinne* 「歩く、走る」
De hûn koe de hazze lang net *berinne*. 「犬は (de hûn) ウサギ
に (de hazze) 走っても追いつく (第1不定詞 *berinne*) ことが
到底できなかった (koe lang net)」(Tamminga 1963: 203 一
部変更)

西フ *beride* 「(車などで) …に到着する」←*ride* 「(車などで) 行く」
Wy sille Ljouwert yn in oere *beride* kinne. 「私たちは (wy) 1
時間で (yn in oere) リャウエトに (Ljouwert 都市名) 車を運転
して到着する (第1不定詞 *beride*) ことができる (kinne) だろう
(sille)」(Hoekstra 1998: 147 一部変更)

ドイツ語とオランダ語の対応語は皆無ではないが、少数にとどまる。

- (11) ① 西フ *besile* 「航海して…にたどり着く」←*sile* 「航海する」
オ *bezeilen*←*zeilen*
- ② 西フ *besmite* 「…を投げて…に命中させる」←*smite* 「…を投げる」
ド *beschmeißen*←*schmeißen*
- ③ 西フ *begoetsje* 「歓迎する」←*groetsje* 「あいさつする」
オ *begroeten*←*groeten*
ド *begrüßen*←*grüßen*
- ④ 西フ *betankje* 「厚く感謝する」←*tankje* 「感謝する」
オ *bedanken*←*danken*
ド *sich bedanken* (再帰動詞)←*danken*

西フリジア語の be-動詞は「間接的収益・獲得」を表すこともある。つまり、
動作の達成によって間接的にもたらされる対象を新たに目的語とする他動詞
を派生する。

(12) 他動詞の派生：間接的収益・獲得

西フ *betrouwe* 「結婚して…を得る」←*trouwe* 「結婚する」

Hy *hat* mei syn wiif twa boerepleatsen *betroud*. 「彼は (hy) 二つ農場を (twa boerepleatsen) 奥さんと (mei syn wiif) 結婚して手に入れた (現在完了形 *hat...betroud*)」(Tamminga 1963: 203 一部変更)

西フ *befiskje* 「漁をして (…を) 得る」←*fiskje* 「漁をする」

Hy *befiske* op 'e Sudersee in sober stikje brea. 「彼は (hy) ザイデル海で (op 'e Sudersee) わずかなパンを (in sober stikje brea) 漁をして得ていた (過去形 *befiske*)」(ib. 203 一部変更)

ドイツ語とオランダ語の対応語は少数にとどまる。動詞の語形は異なるが、ドイツ語には接頭辞 *er-* の対応例がある ((48)参照)。

(13) 西フ *betrouwe* 「結婚して…を得る」←*trouwe* 「結婚する」

ド [*erheiraten* (接頭辞 *er-*)]←*heiraten*

西フ *de frijheid befjochtsje* 「戦って自由を勝ち取る」←*fjochtsje* 「戦う」

オ *de vrijheid bevechten*←*vechten*

ド [*die Freiheit erkämpfen* (接頭辞 *er-*)]←*kämpfen*

さらに、西フリジア語の *be-* は動作の達成によって主語に発生する「身体的不足・不快感」を新たな目的語として、自動詞から他動詞を派生することがある。この用法は他の2言語にはほとんど見られない。

(14) 他動詞の派生：身体的不足・不快感

西フ *berinne* 「歩いて・走って…という状態になる (=…を得る)」←
rinne 「歩く, 走る」

Drink mar ris op, jim sille wol toarst *berûn hawwe*. 「飲み干しなさい (drink... op) よ (mar ris), 君たちは (jim) 歩いてのど

が渴いた (=のどの渴きを (toarst) 歩いて得た (完了分詞 *berûn hawwe*)) だろう (sille)」(WFT 2/1986: 103)

西フ *bereizgie* 「旅行して…という状態になる (=…を得る)」←*reizgie*
「旅行する」

Hja *hat* pineholle *bereizge*. 「彼女は (hja) 旅行をしてから頭痛がした (=頭痛を (pineholle) 旅行して得た (現在完了形 *hat… bereizge*))」(Hoekstra 1998: 145 一部変更)

2.3. 西フリジア語に特徴的な be-動詞 (2): 自動詞の派生

西フリジア語の be- は自動詞を派生することもある。これは動作によって変化を被る被動作主 (patient) を主語とする能格動詞 (ergative verb) であり、基底構造で他動詞の目的語に相当する非対格動詞 (unaccusative verb) にあたる。完了の助動詞には *hawwe* (ド *haben*, 英 *have*) ではなく、*wêze* (ド *sein*, 英 *be*) を用いる。

まず、もとの動詞が能格動詞 (または非対格動詞) としての自動詞の場合がある。これは動作の達成と結果の意味を強調するものであり、be- を除いても意味的には異なるが、文法的には問題がない。

(15) 自動詞 (能格動詞) の派生: 自動詞 (能格動詞) からの派生

西フ *bestjurje* 「しっかり固まる」←*stjurje* 「固まる」

It semint *wie bestjurre*. 「セメントは (it semint) しっかり固まっていた (過去分詞 *wie bestjurre*)」(Dykstra 2000: 50)

西フ *bedije* 「よく繁栄・繁茂する」←*dije* 「繁栄・繁茂する」

{*Sneinswurk/Dy beam*} *bedijt* net. 「日曜仕事は (*sneinswurk*) 大成しない (現在形 *bedijt net*)/あの木は (*dy beam*) 十分に茂らない (現在形 *bedijt net*)」(Zantema 1984: 58)

この場合、話法の助動詞 *sille* 「…だろう」などと副詞 *wol* 「たぶん」(ド *wohl*), *wat/in bytsje* 「ちょっと, 少し」(ド (et)was/ein bisschen) など

伴って、話者の主観的な予測や期待をこめた例が散見される。

(16) 西フ *bekrimpe* 「ぐっと縮む」←*krimpe* 「縮む」

Dat doek sil wol wat *bekrimpe* by it waskjen. 「あの布は (dat doek) たぶん (wol) 洗うと (by it waskjen) 少し (wat) ぐっと縮む (第1不定詞 *bekrimpe*) だろう (sil)」(ib. 71 一部変更)

西フ *bebetterje* 「しだいに良くなる, なおる」←*betterje* 「良くなる, なおる」

De wûne sil wol *bebetterje*. 「傷は (de wûne) たぶん (wol) だんだん良くなるだろう (第1不定詞 *bebetterje*) だろう (sil)」(FHW 2008: 86)

西フ *bewenne* 「十分に慣れる」←*wenne* 「慣れる」

Hja fielt har dêr noch net sa thús, mar it sil wol wat *bewenne*. 「彼女は (hja) そこでは (dêr) まだ (noch) それほど (sa) 落ち着いた (thús) 感じがしていませんが (fielt har...net), でも (mar) それは (it) たぶん (wol) 少しは (wat) ちゃんと慣れてくる (第1不定詞 *bewenne*) でしょう (sille)」(Hoekstra 1998: 146 一部変更)

もとの動詞が他動詞の場合もある。このとき、be-の付加によってもとの他動詞の目的語に相当する対象が主語になり、動作の達成による変化を被って結果を生じることが示される。

(17) 自動詞 (能格動詞) の派生: 他動詞からの派生

西フ *bebakke* 「(パンなど) が焼いて縮む」←*bakke* 「(パンなど) を焼く」¹¹

¹¹ この *bebakke* は(8)でも援用した be-動詞である。このように、ひとつの be-動詞が複数の用法で用いられることも少なくない (清水 2002: 56f., 清水 2006a: 567f.)。

It brea *is bebakt*. 「そのライ麦パンは (it brea) 焼くと縮んだ (is bebakt)」 (Zantema 1984: 57)

西フ *beslaan/beteare* 「…という結果になる」←*slaan* 「打つ」/*teare* 「たたむ」

De gearkomste *is goed* {*beslein/beteard*}. 「会議は (de gearkomste) 成功した (=良い (goed) 結果になった (現在完了形 {*beslein/beteard*}))」 (Dykstra 2000: 47, 51)

この場合も、話法の助動詞 *moatte* 「…しなければならない」(ド *müssen*, 英 *must*) などと副詞 *wat/in bytsje* 「ちょっと, 少し」などを伴って、話者の主観的な要求を表現する例が多く見られる。

(18) 西フ *bebrûke* 「…が使ってなじむようになる」←*brûke* 「…を使う」
Sa'n nij ark moat earst in bytsje *bebrûke*. 「そういう新しい道具は (sa'n nij ark) まず (earst) 少し (in bytsje) 使ってなじませる (=使ってなじむようになる (第1不定詞 *bebrûke*)) 必要がある (moat)」 (Tamminga 1963: 205 一部変更)

西フ *bedrage* 「服などが着てなじむようになる」←*drage* 「服などを着る」

Dizze nije klean moatte noch wat *bedrage*. 「この新しい服は (dizze nije klean) まだ (noch) 少し (wat) 着てなじませる (=着てなじむようになる (第1不定詞 *bedrage*)) 必要がある (moatte)」 (Sytstra/Hof 1925: 128 一部変更)

さらに、もとの動詞が非人称動詞の場合がある。

(19) 自動詞 (能格動詞) の派生: 非人称動詞からの派生

西フ *besnije* 「…が雪で覆われる」←*snije* 「雪が降る」(it *snijt* (ド *es schneit*, 英 *it snows*))

It lân *besnijt*.「その土地は(it lân) 雪で覆われる(現在形 *besnijt*)」
(Veenstra 1988: 161)

西フ *befrieze* 「…が凍りつく・凍傷になる」←*frieze* 「氷が張る, 霜が降りる」(it *friest* (ド *es friert*, 英 *it freezes*))

It wetter *is beferzen*. 「水が(it wetter) 凍りついた(現在完了形 *is beferzen*)」(Dykstra 2000: 31)

この場合にも, 話法の助動詞 *moatte* 「…しなければならない」と副詞 *wat/in bytsje* 「ちょっと, 少し」などを伴って, 話者の主観的な要求を表現する例が多く見られる。

(20) 西フ *bereine* 「…が雨で濡れる」←*reine* 「雨が降る」(it *reint* (ド *es regnet*, 英 *it rains*))¹²

Dong moat wat *bereine*. 「肥料は(dong) 少し(wat) 雨にさらす(=雨で濡れる(第1不定詞 *bereine*)) 必要がある(moat)」(WFT 2/1986: 94)

西フ *besimmerje* 「…が夏を越してなじむようになる」/*bewinterje* 「…が冬を越してなじむようになる」←*simmerje* 「夏になる」/*winterje* 「冬になる」(it {*simmer(e)t/winter(e)t*} (ド *es* {*sommert/wintert*}))

Sokke nije ferkearsregels moatte earst wat *besimmerje* en *bewinterje*. 「そのような新しい交通規則は(sokke nije ferkearsregels) まず(earst) 少し(wat) 夏冬を越してなじませる(=夏と冬を越してなじむようになる(第1不定詞 *besimmerje* en

¹² 西フリジア語の自動詞としての *be-*動詞は, 他動詞としても用いることがある。たとえば, 西フ *bereine*/オ *beregenen*/ド *beregnen* はどれも他動詞「…に水をかける」として用いるが, 西フ *bereine* だけは能格動詞としての自動詞「雨で濡れる」としても用いる。注 11 参照。

bewinterje) 必要がある (*moatte*)」(Tamminga 1963: 205 一部変更)

ドイツ語とオランダ語の対応語はごく少数である。とくにドイツ語の例は稀で、不変化詞を用いた対応例も見られる。

- (2) 西フ *sinke* 「沈む」→ *besinke* 「沈殿する」
オ *zinken* → *bezinken*
ド *sinken* → [*sich 'absetzen* (別の語)]
西フ *kuolje* 「冷える」→ *bekuolje* 「よく冷える」
オ *koelen* → *bekoelen*
ド *kühlen* → [*'abkühlen* ('ab 不変化詞)]

2.4. 西フリジア語に特徴的な be-動詞 (3)：話法的用法

能格動詞としての自動詞を派生する be- が話法的ニュアンスを伴う表現に用いられやすいことは、この種の be-動詞そのものが話法的用法を帯びている事実を示唆している。これと関連するように、西フリジア語の be- には、動詞の語彙の意味も結合価や項構造 (argument structure) も変えない用法がある。それは be- が任意の動詞に付加されて、もっぱら話法的ニュアンスを表現する次の場合である。

そのひとつは、疑問詞 *wat* を伴う疑問文または感嘆文で用いられるもので、be-動詞は話者の嫌悪・驚嘆・好奇心というニュアンスを表す。*wat* は「何」(ド *was*, 英 *what*) を意味する疑問詞だが、be-動詞が要求する目的語というよりも、「何でまた、何と」という意味の不変化詞に近い。2.3.で紹介した能格動詞としての自動詞を派生する場合とは違って、この用法の be-動詞は動作動詞、すなわち非能格動詞 (unergative verb) であり、その主語は基底構造で他動詞の主語に相当し、動作主を表す。

(22) wat+be-動詞 (疑問文・感嘆文) : 嫌悪・驚嘆・好奇心

西フ *bereedride*←*reedride* 「スケートをする」

Wat sil men *bereedride* mei sok striemin iis? 「何でまた (wat) こんなまるでひどい氷のときに (mei sok striemin iis) [人は (men)] スケートをする (第1不定詞 *bereedride*) つもりなんだろう (sil)」 (ib. 204)

西フ *beïggewearje*←*iggewearje* 「文句を言う」

Klaas-jonge, wat *beïggewearrest* dochs? Jou dy der ûnder del! 「クラスや (Klaas-jonge クラスという名前の男の子に向かって), 何をまた (wat) おまえは (代名詞脱落 Ø←do) 文句ばかり言ってる (現在形 *beïggewearrest*) のさ (dochs)。言うことを聞きなさいってば (jou dy der ûnder del)」 (ib. 204)

西フ *betrouwe*←*trouwe* 「結婚する」

Wat silst no al *betrouwe*, jonge, do bist noch fierste jong! 「おまえは (代名詞脱落 Ø←do) 何をまた (wat) 今 (no), もう (al) 結婚する (第1不定詞 *betrouwe*) つもりなんだね (silst), おまえ (jonge 男の子に向かって), おまえは (do) まだ (noch) 若すぎるよ (bist...fierste jong)」 (Tamminga 1963: 204 一部変更)

この be-動詞の話法的用法は *alles* を伴う文にも見られ、奇癖・悪習への話者の軽蔑・否定的ニュアンスを表す。たいてい不定代名詞 *alles* (ド *alles*, 英 *all*) などの要素を伴うが、やはり be-動詞が要求する目的語というよりも、「すべて、なんでも、やたらに」の意味の不変化詞としての性格が強い¹³。

¹³ 次の例では、*alles* に *en elkenien* 「そしてだれでも」 (ド *und jeden*, 英 *and everyone*) が並列されている。*flokke* 「悪口を言う」は他動詞としてののはたらくので、この場合の並列された両者には目的語としての性格が強いともいえる。

西フ *beflokke*←*flokke* 「悪口を言う」

Dy keardel *beflokt* alles en elkenien. 「あいつは (dy keardel) 何でもかんでもどんなやつでも (*alles en elkenien*) 悪口を言う (現在形 *beflokt*)」 (Tamminga

(23) alles+be-動詞：奇癖・悪習への軽蔑・否定的ニュアンス

西フ *belipe*←*lipe* 「めそめそ泣く」

Dat fanke *belypt* alles. 「あの娘ったら (dat fanke 軽蔑的表現, ふつうは dat famke) やたらに何でも (alles) めそめそするんだから (現在形 *belypt*)」(Dijkstra 1900-11: 106 一部変更)

西フ *begnize*←*gnize* 「あざ笑う」

Wêrom no alles te *begnizen* wat dy goede man seit? 「どうして (wêrom) 今さら (no) あんな良い人が (dy goede man) 言う (seit) ことを (wat) 何でもやたらに (alles) あざ笑ったりすることがあるのよ (te-+第2不定詞 te *begnizen*)」(ib. 204)

西フリジア語のすぐれた古典的辞書である Dijkstra (1900-11: 106) は、上記の be- の用法を「西フリジア語に特徴的」(オ kenmerkend Friesch) であると述べている。ドイツ語とオランダ語の be- には、この用法はまったく見られない。

be-動詞に en *bedwaan* (ド und *be-*+*tun*, 英 and *be-*+*do*) を並列させた強調表現を用いる例もある。*bedwaan* は *dwaan* 「する」(ド *tun*, 英 *do*) に be- を付加した語形である。

(24) be-動詞+en *bedwaan*

西フ *bemûskopje*←*mûskopje* 「ひそひそ話をする」

Wat *bemûskopje en bedogge* jimme dochts? 「何をまた (wat) おまえたちは (jimme) ひそひそ話なんかしているんだね (現在形 *bemûskopje en bedogge*)」(Zantema 1984: 60)

西フ *bemaalst*←*male* 「心配する」

Wat *bemaalst en bedochst* ek mei dy âld fyts! 「何をまた (wat) あの古自転車のことなんかも (ek mei dy âld fyts) おまえは (代

名詞脱落 Ø←do) 心配している (現在形 *bemaalst en bedochst*) のさ (dochs)」(Tamminga 1963: 36 一部変更)

次は *al wat...ek* 「…するとしても (…だ)」という譲歩文の例である。

- (25) 西フ *beroppe*←*roppe* 「叫ぶ, 呼ぶ」

Al wat de man ek berôp en bedie, it bist gong net fuort. 「その男が (de man) 何と (al wat) 叫んでみても (過去形 *berôp en bedie*), けものは (it bist) 立ち去らなかった (*gong net fuort*)」(WFT 1/1984: 287)

「be-動詞+*en bedwaan*」は疑問文以外に, 平叙文の受動態完了形 (過去分詞+*wêze* (ド *sein*, 英 *be*)) で用いることもある。

- (26) 西フ 過去分詞 *bepraat/bedien*←*beprate/bedwaan* ← *prate* 「話す」/
dwaan 「する」

Der is hielwat bepraat en bedien. 「たくさん (*hielwat*) 話し合いがなされた (虚辞 *der*+非人称受動態現在完了形 *is...bepraat en bedien*)」(Zantema 1984: 60)

「動詞+*en dwaan*」という *be-* を欠く強調表現も可能である¹⁴。*wat/alles* は伴わない。このように, *be-* は強調表現にさらに話法的ニュアンスを加える役割を果たしているといえる。

¹⁴ 低地ドイツ語にも同様の表現がある。たとえば, 北低地ザクセン方言 (注5参照) では「動詞+*en doon*」という (Thies 2011²: 94, Lindow et al. 1998: 108)。(26)の例は次のようになる。

北低ザ *De Kinner speelt en doot den helen Dag.*

(27) 動詞+en dwaan

西フ Jimme moatte net altyd sa *tsiere en dwaan*. 「君たちは (jimme) いつも (altyd) そんなに (sa) 口げんかばかりしては (第1不定詞 *tsiere en dwaan*) だめだよ (moatte net)」 (Tamminga 1963: 36)

西フ Hja *wrotte en die* fan moarns ier oant jûns let. 「彼女は (hja) 朝早くから (fan moarns ier) 夜遅くまで (oant jûns let) あくせく働いた (過去形 *wrotte en die*)」 (ib. 36)

西フ De bern *boartsje en dogge* de hiele dei. 「子供たちは (de bern) 一日中 (de hiele dei), 遊んでばかりいる (現在形 *boartsje en dogge*)」 (Popkema 2006: 243)

3. 3 言語の動詞接頭辞の体系

上述した西フリジア語の be-動詞の広い用法は、どのような要因に基づくのだろうか。その理由を探るためには、オランダ語とドイツ語を含めた3つの西ゲルマン語の動詞接頭辞を体系的に比較して考察する必要がある。この3言語のゲルマン語起源の動詞接頭辞は、形態的に見ると次の3種類に大別される。以下で順に検討していこう。なお、接頭辞と不変化詞が同形の場合を中心に、接頭辞は「A-」、不変化詞は「rA」として区別する。

(28) Aグループ：不変化詞との語形的対応がない動詞接頭辞

Bグループ：前置詞と同形の不変化詞との語形的対応がある動詞接頭辞

Cグループ：前置詞と同形でない不変化詞との語形的対応がある動詞接頭辞

3.1. 不変化詞との語形的対応がない動詞接頭辞

まず、be-が属するAグループの動詞接頭辞から始めよう。ここでは3言語間で、語形の有無と生産性に大きな相違がある。結論的に言うと、西フリジ

ア語には生産的な接頭辞は be- と fer- しか認められない。

(29) Aグループ：接頭辞（≠不変化詞）

西フ	be-	fer-	ûnt-	te-	なし	なし
オ	be-	ver-	ont-	なし	er-/her-	ge-
ド	be-	ver-	ent-/emp-	zer-	er-	ge-

3言語ともに be- と fer-/ver- は生産的だが、他の接頭辞では生産性に差がある¹⁵。まず、オランダ語の ont- はある程度、生産的だが(Booij 2002: 113)、ドイツ語の ent-/emp- は文語的で生産性が低い。同じく生産性が低い西フリジア語の ûnt- には「離脱・欠如」の意味もあるが、「反転」(他動詞)と「起動」(＝開始, 能格動詞)の意味はオランダ語からの借用である(Hoekstra 1998: 149)。生粋の西フリジア語では不変化詞 'út (ド aus, オ uit, 英 out) など、他の表現で代用することが多い。

(30) 西フ *ûntfalle* 「…から落ちる・消失する」—オ *ontvallen*—ド *entfallen*
(離脱・欠如：能格動詞)

西フ *ûntnimme* 「取り出す」—オ *ontnemen*—ド *entnehmen* (離脱・欠如：他動詞)

(31) 西フ *ûntklaaie*/ ['*útklaaie* (不変化詞 'út)] 「…の服を脱がせる」—オ *ontkleden*/ ['*uitkleden* (不変化詞 'uit)]—ド *entkleiden*/ ['*auskleiden* (不変化詞 'aus)] (反転：他動詞)

西フ ['*ôfwenne* 「(習慣など)をやめさせる」(不変化詞 'ôf (ド ab, 英 off))]—オ *ontwennen*—ド *entwöhnen*/ ['*abgewöhnen* (不変化詞 ab)] (反転：他動詞)

西フ ['*útteie* 「(雪・霜など)が解ける」(不変化詞 út)]—オ *ontdooien*

¹⁵ 英語でも be- と for- は少数の語に残存している。大陸北ゲルマン語でも、be- と for-/fôr- は中低ドイツ語からの借用語に多く見られる代表的な動詞接頭辞である。

—[ド 'auf-/’abtauen (不変化詞 'auf/’ab)](起動：能格動詞)

次に、「分解・破壊」を意味するドイツ語の zer- はある程度、生産性が高いが、西フリジア語の te- は文語的で少数の語に限られる。オランダ語の te- はかつてはある程度、存在したが、今日では残っていない (Van Leoy 1970⁸: 246)。

- (32) 西フ *tekrommelje*「(パンなどを)粉々に砕く」—オ [*verkrummen* (接頭辞 ver-)]—ド *zerkrümmeln*
 西フ *tebrekke*/[*ferbrekke* (接頭辞 fer-)]「砕く, 粉々にする」—オ [*stukbreken* (不変化詞 'stuk)]—ド *zerbrechen*
 西フ *tebarste*「粉々になる, 飛び散る」—[オ (door/open) *barsten* (不変化詞 door, 形容詞 open)]—ド *zerbersten*

ドイツ語の er- は生産性は高くないが、他の 2 言語に比べて語例が多い。一方、オランダ語の er- はドイツ語からの借用であり、きわめて少数の語に限られている。オランダ語では、「反復」を表すドイツ語の er-動詞は her- で補うことが多い¹⁶。西フリジア語には対応する接頭辞が存在しない。

- (33) 西フ なし—オ *ervaren*「経験する」—ド *erfahren*
 西フ なし—オ *herinneren*「思い出させる」—ド *erinnern*

¹⁶ オランダ語の er-動詞には、下記の *ervaren*「経験する」のほかに、ドイツ語と同形の *erbarmen*「哀れみの気持ちを起こさせる」、*erkennen*「認識する」しかない。また、オランダ語の her- は例外的に他の接頭辞と共起して、しかも主アクセントを持つ非分離の接頭辞動詞を派生することがある (例 オ 'herontdekken「再発見する」—過去形 'herontdekte—過去分詞 'herontdekt (ド 'wiederontdecken—entdekte...wieder—'wiederontdeckt)←ontdekken「発見する」(ド ontdekken))。その他の場合にも、her- に主アクセントを置く傾向が認められる (Koenen/Drewes 1986: 487, De Haas/Trommelen 1993: 89ff.)。以上の点で、her- は動詞接頭辞として特殊である。

最後に、ge- はドイツ語とオランダ語に限られており、古くはきわめて生産的だったが、現在では非生産的な動詞接頭辞になっている¹⁷。西フリジア語では、歴史言語学的に接頭辞 ge- が北海ゲルマン語に特徴的な口蓋化(硬口蓋化 palatalization) によって弱まり、消失した (ge->je->e->ゼロ)。

- (34) 西フ brûke 「使う」—オ gebruiken—ド gebrauchen
 西フ leauwe 「信じる, 思う」—オ geloven—ド glauben (gl-<ge-l-)
 西フ lykje 「似ている」—オ (ge)lijken—ド gleichen (gl-<ge-l-)

西フリジア語の接頭辞 ge- で始まる動詞は、おもにオランダ語からの借用である¹⁸。

- (35) 西フ gebiede 「命令する」—オ gebieden—ド gebieten
 西フ genietsje 「楽しむ」—オ genieten—ド genießen

3.2. 前置詞と同形の不変化詞との語形的対応がある動詞接頭辞

このBグループに属する動詞接頭辞には次のものがある¹⁹。

- (36) Bグループ：接頭辞↔不変化詞 (=前置詞)
- | | | | | |
|----|-----------------|-------------|-------------|---------------|
| 西フ | efter-↔'efter | oer-↔'oer | om-↔'om | troch-↔'troch |
| | ûnder-↔'ûnder | oan-↔'oan | foar-↔'foar | |
| オ | achter-↔'achter | over-↔'over | om-↔'om | door-↔'door |

¹⁷ オランダ語では、名詞接頭辞 ge- は現在でもかなり生産的である (De Haas/Trommelen 1993: 64, 83ff.)。ドイツ語でも同様。

¹⁸ 動詞以外の be- で始まる語も同様である (西フ genôch 「十分な」/gefoel 「感情」—オ genoeg/gevoel—ド genug/Gefühl)。

¹⁹ ドイツ語の vor と an は動詞接頭辞として用いない。以下の例では、アクセントの位置を「'」で示して分離動詞 (=不変化詞動詞) と非分離動詞 (=接頭辞動詞) を区別することができる。

	onder-↔'onder	aan-↔'aan	voor-↔'voor	
ド	hinter-↔'hinter	über-↔'über	um-↔'um	durch-↔'durch
	unter-↔'unter	∅↔'an	∅↔'vor	

Bグループに属する西フリジア語の接頭辞動詞には、用法に制限が強く、どれも生産的とはいえない。西フリジア語では、前置詞と同形の不変化詞は分離動詞の不変化詞には用いるが、非分離動詞の接頭辞として用いることは稀である。接頭辞に用いる例は、ほとんど近年のオランダ語からの干渉による翻訳借用である。生粋の西フリジア語では、Bグループの接頭辞を伴う動詞は少ない (Hoekstra 1998: 150)。したがって、西フリジア語の分離動詞の不変化詞は、ドイツ語とオランダ語では分離動詞の不変化詞と非分離動詞の接頭辞の両方に対応することが少なくない。たとえば、ドイツ語の非分離動詞 *über*'setzen「翻訳する」(接頭辞 *über*-) と分離動詞 *'übersetzen*「(船で向こう岸に) 渡す」(不変化詞 *'über*) は、ともに西フリジア語の分離動詞 *'oer sette*「翻訳する；(船で向こう岸に) 渡す」(不変化詞 *'oer*) に対応する。その他の例をいくつか示してみよう。

- (37) 西フ *'foarkomme*「予防する；起こる」(不変化詞 *'foar*)
 オ *voor*'komen「予防する」(接頭辞 *voor*-)↔*'voorkomen*「起こる」
 (不変化詞 *'voor*)
 ド [*zuvor*'kommen「同上」(不変化詞 *zu*'vor)]↔*'vorkommen*「同上」
 (不変化詞 *'vor*)
- (38) 西フ *'trochbrekke*「(慣習を) 破る；二つに割る・割れる」(不変化詞 *'troch*)
 オ *door*'breken「(慣習を) 破る」(接頭辞 *door*-)↔*'doorbreken*「二つに割る・割れる」(不変化詞 *'door*)
 ド *durch*'brechen「同上」(接頭辞 *durch*-)↔*'durchbrechen*「同上」
 (不変化詞 *'durch*)
- (39) 西フ *'oerlizzie*「差し出す；熟考する」(不変化詞 *'oer*)

- オ *over'leggen*「熟考する」(接頭辞 *over-*)↔*'overleggen*「差し出す」
(不変化詞 *'over*)
- ド *über'legen*「熟考する」(接頭辞 *über-*)↔*'überlegen*「上に置く」
(不変化詞 *'über*)

ドイツ語とオランダ語のどちらかが前置詞と同形の接頭辞を用いる場合にも、西フリジア語では通例、もっぱら不変化詞が対応する。

- (40) 西フ *'oernimme* (不変化詞 *'oer*)—オ *'overnemen* (不変化詞 *'over*)
—ド *über'nehmen* (接頭辞 *über-*)
- 西フ *'oanbidde* (不変化詞 *'oan*)—オ *aan'bidden* (接頭辞 *aan-*)—ド
'anbeten (不変化詞 *'an*)

3.3. 前置詞と同形の不変化詞との語形的対応がない動詞接頭辞

最後のCグループに属する動詞接頭辞は3言語に共通だが、どれも生産性は高くない。

- (41) Cグループ：接頭辞↔不変化詞 (≠前置詞)

西フ	<i>wjer-/wer-</i> ↔ <i>'wer/wer'om</i>	<i>mis-</i> ↔ <i>'mis</i>	<i>fol-</i> ↔ <i>'fol</i>
オ	<i>weer-</i> ↔ <i>'weer</i>	<i>mis-</i> ↔ <i>'mis</i>	<i>vol-</i> ↔ <i>'vol</i>
ド	<i>wider-/wieder-</i> ↔ <i>'wider/'wieder</i>	<i>miss-</i> ↔ <i>'miss</i>	<i>voll-/Ø</i>

西フリジア語には、*'wer/wer'om*「反復・逆転」(不変化詞)↔*wjer-/wer-*「対抗, 反射・反響」(接頭辞, *wjer-* と *wer-* は同源), *'mis*「失敗・誤り」(不変化詞)↔*mis-*「不正・不適切, 否定」(接頭辞)という区別があるが、ドイツ語とオランダ語ではあまりはっきりしない。ドイツ語では不変化詞 *'miss* の影が薄く、接頭辞 *miss-* の性格も微妙である。「完成・遂行」の意味を表すオランダ語の *'vol* (不変化詞)↔*vol-* (接頭辞) は接頭辞の例が10語程度で、西フリジア語とドイツ語ではさらにその約半分にすぎない。不変化詞 *'fol/'vol* の

例は西フリジア語でもオランダ語でもごく稀で、ドイツ語の例はない²⁰。

- (42) 西フ *wjer'stean* 「抵抗する」/*wer'helje* 「復唱する」/*wjer'klinke* 「反響する」(接頭辞 *wjer-*: 反射・反響)↔*wersjen/wer'omsjen* 「再会する」(不変化詞 *'wer/wer'om*: 反復)
- オ *weer'staan* / [*her'halen* (接頭辞 *her-*)] / *weer'klinken* (接頭辞 *weer-*) ↔ *'weerzien* (不変化詞 *'weer*)
- ド *wider'stehen/wieder'holen* (接頭辞 *wider-/wieder-*) ↔ *'widerklingen/'wiedersehen* (不変化詞 *'wider/'wieder*)
- (43) 西フ *mis'hannelje* 「虐待する」(接頭辞 *mis-*: 不正・不適切) ↔ *'mis-slaan* 「打ち損じる」/*misferstean* 「誤解する」(不変化詞 *'mis*: 失敗・誤り)
- オ *mis'handelen* ↔ *'misslaan/'misverstaan*
- ド *miss'handeln* ~ *'misshandeln* (接頭辞 *miss-* ~ 不変化詞 *'miss*) ↔ [*'fehlschlagen* (形容詞 *fehl*)] / *'missverstehen* (不変化詞 *'mis*)
- (44) 西フ *fol'bringe* 「成し遂げる」(接頭辞 *fol-*) ↔ *'folhâlde* 「持続する, こらえる」(不変化詞 *'fol*)
- オ *vol'brenge* (接頭辞 *vol-*) ↔ *'volhouden* (不変化詞 *'vol*)
- ド *voll'bringen* (接頭辞 *voll-*) ↔ [*'aus-/durchhalten* (不変化詞 *'aus/'durch*)]

4. 西フリジア語の動詞接頭辞の体系と be-動詞の特質

4.1. 西フリジア語の動詞接頭辞の体系

以上の事実からわかるように, 西フリジア語の接頭辞動詞の特徴は次の3

²⁰ 「満ちた」の意味の西フ *fol*/オ *vol* (西フ *'foljitte* 「満杯にする」) - オ *'volgieten* (ド *voll gießen*) は不変化詞ではなく, 形容詞なので, 対象外である (De Haas/Trommelen 1993: 144)。

点にまとめられる。

- (45) ① Aグループの「不変化詞との語形的対応がない動詞接頭辞」(3.1.)
 の中で、ドイツ語とオランダ語の *ge-*, *er-* に対応するものがなく、
 生産的なのは *be-* と *fer-* に限られる。
- ② Bグループの「前置詞と同形の不変化詞との語形的対応がある動詞
 接頭辞」(3.2.) がきわめて限られている。
- ③ Cグループの「不変化詞との語形的対応がない動詞接頭辞」(3.3.)
 はすべて非生産的である。

be- が属するAグループに共通する意味的特徴は、完了アスペクト (perfective aspect) または完結アスペクト (telic aspect) であり、動作が終点まで遂行されることを表す (Hoekstra 1998: 144, Booij 2002: 117)。また、個々の接頭辞は空間的・時間的方向づけを特定化し、結合価の変更を伴うことがある。これはB/Cグループでも同様である。西フリジア語にはCグループの動詞接頭辞が稀なので、動詞接頭辞による完了・完結アスペクトの表現手段はA/Bグループに求められることになる。両者をまとめると、3言語のA/B/Cグループの接頭辞が付与する動作の空間的・時間的方向づけという意味的役割は、もとの動詞が表す事象の実現を促進するか変更・阻害するかによって、新たに次の2つのグループに大別できることになる²¹。

- (46) Dグループ：事象の実現を促進する意味を加える動詞接頭辞
 西フ *be-* オ/ド *fer-* オ/ド *ver-* オ/ド *er-* オ *her-*
 西フ *te-* /ド *zer-* オ/ド *ge-* 西フ *fol-* /オ *vol-* /ド *voll-*
 Eグループ：事象の実現に変更・阻害の意味を加える動詞接頭辞

²¹ 「事象の実現」(ド Realisierung eines Geschehens) とは、動詞が表す動作(ド Tätigkeit)の達成または過程(ド Vorgang)の終結を指す総称的な意味的概念である。4.3. で述べる中高ドイツ語の *ge-* の説明でも同じ用語を用いる。

西フ *fer-/オ/ド ver-* 西フ *ûnt-/オ ont-/ド ent-/emp-*
 西フ/オ *mis-/ド miss-* 西フ *wjer-/wer-/オ weer-/ド wider-/*
wieder-

西フリジア語では、Dグループの動詞接頭辞がドイツ語とオランダ語と違って、ge- と er- を欠いている。te- と fol- は生産性がきわめて低いので除外すると、西フリジア語のDグループの接頭辞には be- と fer- しかない。西フ *fer-/オ/ド ver-* の意味は3言語とも多岐にわたり、「…を施す」という装備動詞(例 西フ *ferstienje*「石化する」—オ *verstenen*—ド *versteinern*)と「目標・成果」(例 西フ *ferwinne*「克服する」—オ/ド *verwinden*)の意味ではDグループ、「否定・損害」(例 西フ *ferachtsje*「軽蔑する」—オ/ド *verachten*；西フ *ferdrinke*「(金・時間など)を飲酒に費やす」—オ *verdrinken*—ド *vertrinken*)などの意味ではDグループに属し、所属がまたがっている²²。一方、ge- は古くは西ゲルマン語に共通して完了アスペクトの表現に多用された代表的な動詞接頭辞で、オランダ語やドイツ語などの過去分詞での使用に名残りをとどめている。

私見では、西フリジア語の be- は ge- の欠如を補う形で歴史言語学的に用法を拡大したと考えられる。er- の欠如も be- の用法の拡大に拍車をかけたと推定される。また、fer- はその多義性のために、Dグループの代表的な動詞接頭辞には発達し得なかったと推察される。

じじつ、西フリジア語では、ドイツ語とオランダ語の ge-動詞に be-動詞が対応することがある。オランダ語でも be-動詞の対応例が見られる。

²² 西フ *fer-/オ/ド ver-*の多義性は、歴史言語学的には3種類の接頭辞(ゴート語の *fra-/faír-/faúr-*)の融合に由来することによる(Pfeifer 2004²: 1497)。他の動詞接頭辞との競合例や対応例もある(例 西フ *tebite/ferbite*「かみ砕く」、西フ *misliede/ferliede*「間違った方向に導く」、*tekrommelje*「(パンなど)を粉々に砕く」—オ *verkrumelen* (3. 1.))。西フ *fer-*についての詳細は清水(2002: 61ff.)、清水(2006a: 571ff.)参照。

- (47) 西フ (be)dije 「繁栄する」—オ *gedijen*—ド *gedeihen*
 西フ (be)wenne 「慣れさせる, 慣れる」—オ (ge)wennen—ド *gewöhnen*
 「慣れさせる」
 西フ *befalle* 「気に入る」—オ *bevallen*—ド *gefallen*
 西フ (be)hearre 「属する」—オ (be)horen—ド *gehören*

また、西フリジア語では、ドイツ語の er-動詞に be-動詞が対応することが少なくない。上述のように、er-の使用がきわめて制限されているオランダ語でも、同様の傾向が認められる ((13)参照)。

- (48) 西フ *befrieze* 「凍る, 凍傷になる」—オ *bevriezen*—ド *erfrieren/gefrieren*
 西フ *beklimme* 「…によじのぼる」—オ *beklimmen*—ド *erklimmen*
 西フ *belibje* 「体験する」—オ *beleven*—ド *erleben*
 西フ *benearre* 「任命する」—オ *benoemen*—ド *benennen/ernennen*
 西フ *berikke* 「到達する」—オ *bereiken*—ド *erreichen*
 西フ *besparje* 「貯蓄する」—オ *besparen*—ド *ersparen*
 西フ *betinke* 「考え出す」—オ *bedenken*—ド *erdenken*
 西フ *bewinterje* 「越冬する」—オ [*over*'winteren (接頭辞 *over*-)]—ド [*über*'wintern (接頭辞 *über*-) / *durch*wintern (不変化詞 'durch)]

過去分詞での ge- と be- の類似性を示す例として、西フリジア語には動作の結果としての状態を明示する意味で、過去分詞として多用する be-動詞がある。これはおもに年中行事や社会的慣習を経た主語の身体的・精神的状態を示し、様態を表す文成分を伴うことが多い。

- (49) 西フ 過去分詞 *bemerke* 「縁日 (merk) の後で…という気分になった」
 ← *bemerkje*

Bist wat goed *bemerke* sânt juster? 「君は (代名詞脱落 Ø←do) 昨日から (sânt juster), 何か (wat) 良い気分 (goed) 縁日が終わってなっているのかい (bist...*bemerke*)」 (Tamminga 1963: 203 一部変更)

西フ 過去分詞 *behúshimmele* 「家を (hús←hûs) 大掃除して (himmelje) …という状態になった」←*behúshimmelje*

Soe muoike wat knap *behúshimmele* wêze? 「叔母は (muoike) 大掃除して少しは家がきれいになった (=少しは (wat) きれいに (knap) 家を大掃除した (*behúshimmele* wêze)) のだろうか (soe)」 (ib. 204)

西フ 過去分詞 *bewive* 「結婚して…ほど嫁 (=妻 wiif) らしくなった」←*bewiivje*

Gelske liket aardich *bewive* te wêzen. 「ゲルスケは (Gelske 女名) 立派に (aardich) 嫁らしくなった (*bewive* te wêzen) ようだ (liket)」 (ib. 204 一部変更)

次例の *beblet* 「血まみれの」 (*bliede* 「出血する」) は過去分詞が形容詞として定着したもので、「be-動詞+en *bedwaan*」(24~27参照) の並列構文で用いられている。

(50) 西フ 過去分詞 *beblet* 「血まみれの」←*bebliede*

Syn hân wie hielendal *beblet en bedien*. 「彼の手は (syn hân) すっかり (hielendal) 血まみれになっていた (wie *beblet en bedien*)」 (ib. 36)

オランダ語やドイツ語にも、西フ *bereizge*/オ *bereisd*/ド *bereist* 「広く旅行した」、オ *bebrild*/ド *bebrillt* 「眼鏡をかけた」のような過去分詞の対応例があり、ドイツ語には *beherzt* 「勇気のある」、*beleibt* 「太った」、*bewandert* 「精通した」などの例もある (Kuroda 2005: 118)。

4.2. 西フリジア語の be-動詞の特質

以上の説明に基づいて、西フリジア語の be-動詞の特質について考察してみよう。歴史言語学的に見ると、be- は前置詞または不変化詞の西フ by/オ bij/ド bei およびラテン語の ambi「…のまわりに」と同源であり²³、「対象を包囲する」という意味を原義とする。その後、語彙的に固定した be-動詞を除けば、原義から転じて、動作の達成による対象への全体的影響とそれに伴う完了アスペクトまたは結果性 (resultativity) の意味を動詞に付与するようになった。3 言語に共通の他動詞化、代換表現 (全体的影響、達成目的語から被動目的語への転換)、装備動詞の派生はその例であり ((4)~(7))、統語論的に動詞の結合価の変更を引き起こした。ge- と be- の類似性は一部の過去分詞での be- の使用にもうかがえるが ((49)~(50))、北海ゲルマン語に特有の口蓋化による ge- の消失に加えて、er- を欠く西フリジア語では、be- がもとの動詞が表す事象の実現を促進する意味を担う唯一の生産的な動詞接頭辞となったと考えられる。そして、「中へ入れ込む」の意味の「yn+名詞句」による代換表現、効果・充足、到達・遂行、間接的収益・獲得、身体的不足・不快感を表す用法を発達させた ((8)~(14))。この点だけでも、西フリジア語の be- はドイツ語とオランダ語の be- よりも用法がかなり広い。

これに加えて、西フリジア語の be- は自動詞としての能格動詞 (=非対格動詞) の派生という、他の 2 言語、とくに ge- と er- を有するドイツ語にはほとんど見られない用法を発達させた ((15)~(21))。能格動詞は非対格動詞ともいわれるように、その主格主語は基底構造において動作の影響を被る他動詞の対格目的語に相当する。この点で、能格動詞としての be-動詞の派生は、他動詞としての be-動詞の派生と類似点があり、対象への全体的影響と事象の実現による変化を明示する意味的な役割を押し進めたことによるといえる。ただし、これは動詞の結合価だけでなく、項構造の全面的な変更を伴うものであり、他の 2 言語、とくに他動詞の派生にほぼ限定されたドイツ語の be- の用法

²³ ambi の後半部 -bi が西フ by/オ bij/ド bei および be- と同源で、前半部 am- は西フ/オ om/ド um と同源である。

とは大きく異なる。この用法の西フリジア語の be- は、話法の助動詞や話法的ニュアンスを伴う文成分と用いる例が少ないが、これはこの be- がアスペクト的意味に加えて、話法的意味を帯びていることを示している。そして、その延長上にあるように、西フリジア語の動詞接頭辞 be- は「wat + be-動詞」と「alles + be-動詞」で顕著に見られる話法的用法という、独自の特徴を獲得することになった(22)~(25)。これは動詞の結合価、項構造、語彙の意味のどれをも変更せず、話者の主観的な感情表現の手段として任意の動詞に自由に付加される be- の用法である。

4.3. 中高ドイツ語の ge-動詞との比較から

じつは、西フリジア語の be- の話法的用法は、ドイツ語でもかつての動詞接頭辞 ge- に見られた用法に類似している。ここで、中高ドイツ語(ド Mittelhochdeutsch 中高ド, 1050~1350)の動詞接頭辞 ge- について述べてみよう。ge- は意味的に見てラテン語の接頭辞 con-/前置詞 cum と同源とされ、「集合・凝縮」を原義とするが、ゲルマン語の古語の多くでは、完了アスペクトの代表的な表現手段として多用されるようになった。現代ドイツ語ではこの機能が衰え、ge- の使用は過去分詞の形態的指標として定着したほかに、一部の動詞で独立した語彙として固定したものに限られている。これを「語彙的 ge-」(ド *lexikalisches ge-*) と呼ぶことにする。「語彙的 ge-」は中高ドイツ語にも見られる(例 中高ド *genügen* 「十分である」/*geräten* 「陥る」↔*Ø/räten* 「忠告する」(ド *genügen/geraten*↔*Ø/raten*)。)

しかし、このほかに、中高ドイツ語の ge- はもとの動詞の語彙的意味を変更することなく、動詞の種類を問わずに、不定詞・現在形・過去形に広範に付加された。これを「文法的 ge-」(ド *grammatisches ge-*) と呼ぶことにしよう²⁴。「文法的 ge-」(以下ではたんに ge- とする)はとくに以下の指標と共に共起する例が目立つ²⁵。13世紀の代表的な宮廷叙事詩であるゴットフリート・フォ

²⁴ 清水(1984)参照。伝統的には「可動的 ge-」(ド *bewegliches ge-*) と呼ばれることがある。

ン・シュトラースブルク『トリスタン』(Gottfried von Straßburg (?~1215頃): *Tristan*, 19,548行) について行った筆者の調査(清水 1984)によれば、次のようになる²⁶。

- (51) 時間的前後関係を表す従属接続詞(中高ド nu/alse/dô/biz/unz/sit/sô/êなど(ド nun/als「…したとき」など))に導かれた従属文:「完了・時間的先行性」(105例, 他の指標なし:104例)

中高ド nu man *gelante* in eine habe, nu gie daz volc almeistic abe durch banekie ûz an daz lant. 「今や港に入ると(過去形 *gelante*: *gelanden*←*lenden*), ほとんどの人々は気晴らしのために陸に上がった」(Tristan 11657-9)

- (52) 中高ド ie(mer)(ド je)との共起:「偶発」(124例, 他の指標なし:20例, 否定(nie, niemer(ド nie, nimmer)など)と共起:66例)

中高ド er ist ein sinnelôser man, der âne bûrgen durch daz wîp iemer *geveilet* den lîp. 「保証するものもなく女性のために命を賭ける(現在形 *geveilet*: *geveilen*←*veilen*)者は, 愚か者です」(ib. 9890-2)

- (53) 中高ド vil(ド viel)との共起:「強度・集中」(19例, 他の指標なし:9例)

中高ド und ist vil lûtzel iht sô guot, ez enswache, der'z ze vil *getuot*. 「それをあまりに多くしすぎても(現在形 *getuot*: *getuon*←*tuon*)価値が失われないようなものは, まずありません」(ib. 1859-60)

- (54) 中高ド wol(ド wohl)との共起:「可能・能力」(27例, 他の指標なし:9例)

²⁵ 「文法的 ge-」は事象の実現とは無関係にその継続を表す現在分詞では, ほとんど現れない。ただし, 事象の実現が最も強調されるはずの命令形は「文法的 ge-」の指標をなさず, その理由は不明である。

²⁶ 引用例は Ranke (1971) のテキストに長音符を施した Krohn (1981²/1980) に従い, ae は æ, oe は œ の合字に置換した。日本語訳はゴットフリート(石川訳) (1976) による。和訳の次のカッコ内の数字は, 用例が現れた行数を示す。

中高ド tuot mir daz lantrecht, alse ez sol. ich *geteidinge* wol. 「しかるべく裁判が私に対して行われるのであれば、私は立派に弁明します (現在形 *geteidinge*: *geteidinge*←*teidingen*)」 (ib. 11041-2)

- (55) 話法の助動詞：中高ド mac/kan(ド kann/[vermag]), wil/sol/muoz/getar/darf (ド will/soll/muss/英 dare/ド darf) に支配された不定詞 (195 例 (mac/kan 「可能・能力」: 157 例, wil/sol/getar/muoz/darf : 38 例), 他の指標なし: 55 例)

中高ド vriunt unde hêrre, ir wizzet wol, belibens mac hie niht *gesîn* : 「最愛の人にしてわが君よ、おわかりでしょうが、ここにどまることはできないのです (不定詞 *gesîn*←*sin*)」 (ib. 1550-1)

中高ド er vüeget unde suochet an, dâ man'z an in *gesuochen* kan, alse gevuoge und alse wol, als er von allem rehte sol. 「彼 (=キリスト) は、人がそれをお頼み申し上げることができる (不定詞 *gesuochen*←*suochen*) ならば、まさにしかるべくしなやかに立派に適合され、順応されます」 (ib. 15737-40)

- (56) 否定文 (162 例, 他の指標なし: 11 例)

中高ド von herzeleide ir aber geschach, daz sîne *gehôrte* noch *gesach*. 「心痛のために彼女は耳が聞こえなくなり (過去形 *gehôrte*: *gehœren*←*hœren*), 目も見えなくなった (過去形 *gesach*: *gesehen*←*sehen*)」 (ib. 1389-90)

- (57) 疑問詞疑問文 (*wie/waz/welh/wâ/wer* (ド *wie/was/welch/wo/wer*)) (63 例, 他の指標なし (*wie/waz/welh*): 44 例)

中高ド got hêrre, wie *gewirbe* ich? 「神よ、私はそれではどのようにしたらいいのでしょうか (現在形 *gewirbe*: *gewerben*←*werben*)」 (ib. 2360)

- (58) sw-讓歩文 (*swaz/swer/swâ/swelh/swenne/swie/swar/sweder* (ド *was auch immer* 「何であっても」など)) (78 例, 他の指標なし: 56 例)

中高ド swaz vuoge er aber an der stete mit gebærden oder mit spil *getete*, daz was in dâ wider alse ein wint: 「しかし、彼がそのとき

振る舞いと遊びにかんしてどんな巧妙さを成し遂げたとしても（過去形 *getete: getuon←tuon*）、それはあのことに比べれば彼らには取るに足らないように思われた」（ib. 2279-81）

(59) 目的・願望を表す接続法（35例、他の指標なし：23例）

中高ドイツ *seht, daz mich iht geriuwe, daz ich iu guot unde leben an iuwer triuwe hân ergeben*. 「私があなたの誠意にたいして財産と命をお任せしたことを後悔しないように（現在形 *geriuwe: geriuwen←riuwen*）してください」（ib. 9556-8）

以上の例からわかるように、中高ドイツ語の *ge-* はすでに完了アスペクトの意味が薄れており、「事象の実現」（注 21 参照）というべきアスペクト的性格を残すおおまかな意味を話者の主観的判断によって強調する用法に転じていたと考えられる。*ge-* は完了アスペクトを表示するはたらきを弱めて、動的な動作・行為だけでなく、静的な状態を表す動詞にも広く用い、主として話法的意味と関連する構文あるいは文脈で多用された。時間的前後関係を表す従属接続詞に導かれた従属文で完了・時間的先行性を示す (51) の指標は、*ge-* の文法的意味がひとつの事象の完了あるいは完結を表示する典型的なアスペクトとしてのはたらきから、別の事象に先行するという2つの事象間の時間的前後関係の表示（Jakobson (1957) のいう「タクシス」（*taxis*））に転じた結果と考えられる。これは、完了アスペクトを表示するかつての *ge-* の機能のなごりといえる。それを除くと、「偶発」の意味を表す (52) *ie(mer)* と「強度・集中」を表す (53) *vil* にはアスペクト的性格が部分的に認められるものの、(54) から (59) ではそれよりも話法的性格が段階的に強まっていくのがわかる。一般に *ge-* は複数の指標が重複する場合に、いっそう現れやすくなる傾向がある。単独では *ge-* の指標として十分とはいえない (52) *ie(mer)* および (56) 否定文では、とくにそうである。これは、複数の指標が重なると、話法的なニュアンスがそれだけ強まることと関係があるといえよう。

中高ドイツ語では *ge-* の付加はかなり自由であり、(51)~(59) の指標を欠く場合にも、意味的に類似した文脈で付加される例が数多く観察される。これに

は、韻文作品に不可欠な韻律的要因も関与していただろう。ge- は抑音部(ド Senkung) を作り出し、動詞の語幹部分を揚音部(ド Hebung) として対比させるという韻律上の機能を担うこともあったと考えられる。

(60) 動詞+noch+ge-動詞

中高ド ern kunde *sprechen* noch *gelân*, 「彼は話す(不定詞 *sprechen*)
ことも黙る(不定詞 *gelân*←*lân*) こともできなかった」(ib. 11255)
sine mohte sterben noch *geleben*. 「彼女は死ぬ(不定詞 *sterben*)
ことも生きる(不定詞 *geleben*←*leben*) こともできなかった」(ib.
18478)

しかし、韻律とは無関係に ge- が使用されている例は非常に多く、すべての場合を押し切ることはできない。それよりも重要なのは、テキスト言語学的に見て、ge- は文体的効果を伴って使用されることがあったと考えられる点である。『トリスタン』では、ge- は劇的緊張や心理的葛藤が顕著な箇所でも用いられる傾向がある。たとえば、次がその例である。

(61) 4589-4620 行(32 行中 6 例)：作者ゴットフリートが自らの詩才の欠如を嘆く場面

7741-7838 行(98 行中 15 例)：女王イゾルデが傷ついたトリスタンの噂を聞いて嘆き悲しむ場面

9126-9150 行(25 行中 6 例)：内膳頭が竜を見つけて驚く場面

14386-14475 行(90 行中 13 例)：トリスタンの苦悩と侍女ブランゲーネの同情の台詞を表す場面

15697-15723 行(27 中 6 例)：イゾルデが潔白の誓いを立てる場面

一方、こうした要因を欠く淡々とした客観的描写では、ge- の使用はきわめて少ない。たとえば、次の場面では ge- の使用例がまったくない。

- (62) 10885-11020 行 (136 行中 0 例) : イゾルデ, イゾルデの母, ブランゲーネが登場する様子を服装などの外観を中心に描写する場面
11080-11192 行 (113 行中 0 例) : 女王イゾルデの面前にトリスタンが登場する様子を外見的に描写する場面

以上の点で、西フリジア語の話法的用法の *be-* は中高ドイツ語の「文法的 *ge-*」に類似している。韻律上の技法とは別に、西フリジア語の *be-* は *ge-* と同様に無アクセント音節を形成し、直後の動詞語幹音節にとくに強いアクセントを置いてこれをきわだたせ、話者の感情を投入しやすくする効果を担っているといえよう。

5. まとめ

ロマンス諸語やスラヴ諸語と違って、祖語の時代に文法範疇としてのアスペクトの区別を動詞の語形変化で消失したゲルマン諸語では、古語の時代に、動作・行為または出来事、つまり事象一般の完了・完結を代替的に明示しようとする内在的発達傾向、すなわち、サピア (Edward Sapir) のいうドリフト (drift「駆流」) が潜在していたと考えられる。「過去分詞+*ド haben/sein* (英 *have/be*)」という迂言形式による完了形が台頭し、現在完了形として過去時制の領域にまで徐々に浸透する中で、動詞接頭辞には、とくに *ge-/be-/er-* を中心として、語彙のレベルで動詞に完了アスペクトを付与する機能を他の関連する文法的領域に転用する傾向があったと推定される。ドイツ語史では、完了形の発達が *ge-* の有無によるアスペクトの区別の衰退を促したともいわれている (Ebert 1978: 59f.)。音韻的にも意味的にも弱体化し、中立化した動詞接頭辞 *ge-/er-/be-* (<ゲ **ga-*「集合・凝縮」/**uz-*「出現」/**bi-*「包圍」²⁷) は、話者の視点から事象の実現を主観的に強調する手段としても適していたのだろう。

²⁷ 「ゲ」はゲルマン祖語の略語。

一般に発話には、話者の感情を表出する強調表現がつきものであり、それに好都合な形態的手段があれば、本来の用法を拡大して利用する傾向があると考えられる。西フリジア語の be- と中高ドイツ語の ge- の話法的用法は、そのために発達したと推定される。両者は「語彙的意味>アスペクト（ヴォイスへの影響を伴う）>話法」という文法化（grammaticalization）の過程を反映する好例といえる。ドイツ語史から別の例を挙げれば、「移行」という語彙的意味を担う古高ドイツ語（ド Althochdeutsch 750～1050）の動詞 *werdan*（ド *werden*）が現在分詞とともに「始動アスペクト」（inchoative aspect）を表すようになり、現代ドイツ語では、3人称単数形で代表させると、もっぱら「不定詞+wird/würde」という定形（infinite form）で用いて、話法の助動詞に発達した事実が挙げられる（ド *er {wird/würde} kommen*（英 *he {will/would} come*）↔**er wurde kommen/*kommen zu werden/*er ist kommen (ge)worden*）。西フリジア語の be- には、ドイツ語では失われたかつての動詞接頭辞の文法化のメカニズムが生きており、それが ge- の消失と er- の欠如によって、be- の機能的拡充に顕在化し、現在まで保たれているといえよう。

動詞接頭辞は全体として緊密な構造的関係にあり、語場（ド *Wortfeld*）を形成していると考えられる。ドイツ語、オランダ語、西フリジア語は歴史的にも地理的にも密接な相互関係にある西ゲルマン語の構成員であり、時代と形式は異なっても、言語構造とその発達を貫く共通の潮流を分かち合っているのである。

参考文献

- Booij, Geert. 2002. *The morphology of Dutch*. Oxford/New York. Oxford University Press.
- De Haas, Wim/Trommelen, Mieke 1993. *Morfologisch handboek van het Nederlands. Een overzicht van de woordvorming*. 's-Gravenhage. SDU Uitgeverij.
- Dyk, Siebren (1992) Warum gibt es im westerlauwersschen und Föhnerfriesisch eine Nomeninkorporation? In: Volkert Faltings/Alastair G. W. Walker/Ommo Wilts (Hrsg.) *Friesische Studien I. NOWELE Supplement Vol. 8*, 143-169.

- Dijk, Siebren (1997) *Noun incorporation in Frisian*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Dijkstra, Waling 1900-11. (1971 復刻版). *Friesch woordenboek (Lexicon friscum)*. Amsterdam/Leeuwarden. S. Emmering/De Tille.
- Dykstra, Anne 2000. *Frysk-Ingelsk wurdboek/Frisian-English dictionary*. Ljouwert/Leeuwarden. Fryske Akademy/Afûk.
- Ebert, Robert Peter (1978) *Historische Syntax des Deutschen*. Stuttgart. Metzler.
- ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (石川敬三 訳) 1976 『トリスタンとイゾルデ』 郁文堂.
- FHW: *Frysk hânwurdboek. a-m.* (2008). Ljouwert. Fryske Akademy/Afûk.
- Hoekstra, Jarich 1998. *Fryske wurdfoarming*. Ljouwert. Fryske Akademy.
- Jakobson, Roman. 1958. Shifters, verbal categories and the Russian verb. In: *Selected Writings of Roman Jakobson II* (1971). The Hague/New York. Mouton. 130-147.
- Koenen, M. J./Drewes, J. B. (red.). 1986. *Wolters' woordenboek eigentijds Nederlands. Grote Koenen*. Groningen. Wolters-Noordhoff.
- Krohn, Rüdiger (Hrsg.) (1981²/1980) *Gottfried von Straßburg. Tristan*. Bd. 1/2. Stuttgart. Reclam.
- Kuroda, Susumu 2005. Zum Verbalpräfix *be-* im Althochdeutschen und Gegenwart-deutschen. In: Kotin, Michail. L. et.al. (Hrsg.). *Das Deutsche als Forschungsobjekt und als Studienfach*. Frankfurt a. M. Peter Lang. 113-118.
- Lindow, Wolfgang et al. 1998. *Niederdeutsche Grammatik*. Leer. Schuster.
- Pfeifer, Wolfgang (Hrsg.). 1993². *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München. Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Popkema, Jan (2006) *Grammatica Fries*. Utrecht/Leeuwarden. Het Spectrum/Fryske Adkademy.
- Ranke, Friedrich (Hrsg.) (1971) *Gottfried von Straßburg, Tristan und Isold*. Zürich. Weidmann.
- 清水 誠 1984 「Gottfried の „Tristan“ における中高ドイツ語動詞接頭辞 GE- の研究—語彙, 文法, 文体」『ドイツ文学』72 (日本独文学会) 96-110.
- 清水 誠 2002 「西フリジア語の文法構造—動詞 (6)」『北海道大学文学科研究紀要』108. 23-100.
- 清水 誠 2004 「西フリジア語の文法構造—動詞 (8)」『北海道大学文学科研究紀要』112. 1-103.
- 清水 誠 2006a 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
- 清水 誠 2006b 「言語規則と普遍性—フリジア語と関連言語における名詞抱合, 品詞転換, 逆成」『ドイツ文学』127 (日本独文学会) 49-66.

- 清水 誠 2007「ドイツ語, オランダ語, フリジア語の接頭辞動詞と be-動詞」『エネルギー』32 (ドイツ文法理論研究会) 57-78.
- Sytstra, O. H./Hof, J. J. 1925. *Nieuwe Friesche spraakkunst*. Leeuwarden. R. van der Velde.
- Tamminga, D. A. 1963. *Op 'e taelhelling* I. Boalsert. Osinga.
- Thies, Heinrich. 2011² (2010). *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster. Wachholtz.
- Van Loey, A. 1970⁸. *Schönfeld's historische grammatica van het Nederlands*. Zutphen. Thieme.
- Veenstra, Durk H. 1988. Oer de grammatika fan *be-ferba*. In: Siebren Dyk/Ger de Haan. (útj.). *Wurdfoarried en wurdgrammatika: in bondel leksikale stúdzjes*. Ljouwert. Fryske Akademy. 136-174.
- Weggelaar, C. (1986) Noun incorporation in Dutch. *International Journal of American Linguistics* 52, 301-305.
- WFT: *Wurdboek fan de Fryske taal* 1/2. 1984/6. Ljouwert/Leeuwarden. Fryske Akademy.
- Zantema, J. W. 1984. *Frysk wurdboek. Frysk-Nederlânsk*. Drachten/Ljouwert. Osinga/Fryske Akademy.

*本稿は拙稿 (2007) をその後の研究成果を補って大幅に修正し, 発展させて, 別稿としたものである。なお, 本稿の内容はドイツ語に改め, 紙面の制約から約 4,000 語に収めた上で, 下記のフリジア語学文学研究叢書 *Estrikken/Álstråke* に収録される予定である。

Makoto Shimizu „Die *be*-Verben im Westerlauwersschen Friesisch“ In: Jarich Hoekstra (Hrsg.). *Twenty-six Smiles for Alastair – Album Amicorum für Alastair G. H. Walker* (仮題) (Groningen/Kiel/Ljouwert 2013 刊行予定)

*本研究は科研費 (21520425) の助成を受けたものである。